

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『撰理を志すべし—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

道化としてのサタン、サルマシウスそしてチャールズ一世
—王権反駁論から『樂園の喪失』への軌跡—

野呂有子

はじめに

ミルトンの生きた当時の英国はまさに動乱の時代であった。ジェームズ一世、チャールズ一世と続いたステュアート王朝の政治的・経済的破綻はもはや繕いようがないほどであった。チャールズは相次ぐ失政から国民の眼を逸らすと同時に、現実の無能無策の自己の姿を直視するのに耐ええず、莫大な費用をかけた宮廷仮面劇の上演に耽溺した。そうした浪費はさらに国庫と英国経済に過重な負担を与えた。王党派と議会派の対立は深刻の度を増し、遂に事態は内戦へと突入していった。

こうした情勢の中でミルトンは積極的に宗教改革と政治改革の世界に身を投じた。『イングランド宗教改革論』（一六四一）、『教会統治の理由』（一六四二）、『離婚の教理と規律』（一六四三）に始まる一連の離婚論、『教育論』（一六四四）、『アレオパジティカ』（同年）、そして『国王と為政者の権限』（一六四九）を皮切りにした一連の王権反駁論、『偶像破壊者』（一六四九）、『イングランド国民のための第一弁護論』（一六五一）、『イングランド国民のための第二弁護論』（一六五四）[以下それぞれ『第一弁護論』、『第二弁護論』とする]を執筆した。さらに『自己弁護論』（一六五五）、『英国史』、『キリスト教教義論』の制作開始、『自由共和国樹立の要諦』（一六六〇）等、失明後も精力的に執筆し続けた。

ほぼ二〇年を政治的活動に捧げたミルトンが、仮にこの時期、韻文執筆に専念していれば、『樂園の喪失』（一六六七）、『樂園の回復』（一六七一）、そして『闘技士サムソン』（同年）のみならず、もっと多くの優れた韻文による大作が生れ出ていたはずであり、それはシェイクスピアの作品群にも匹敵するものになっていたのではないかと、としてミルトンの政治活動への精力的な参加を惜しむ声が、かつて幾度か聞かれたことがある。

しかし論者はこれとはまったく逆の立場を取るものである。仮にミルトンが政治的活動への参加を差し控え、家庭問題、宗教問題、そして政治問題についての論文を執筆していなかったとしたら、後期の三大作品は現在我々が享受するものとはまったく異なるものになっていたはずである。いや、これらの作品そのものが生まれていなかっただろうかさえも定かではない。それほどにミルトンの散文作品は後期の大作群と大きな関わりを持ち、強力な影響を与えたのである。本論考の目的はそれを証明することにある。

かつて新井明は、ミルトンの散文作品再評価の論集、*Politics, Poetics and Hermeneutics in Milton's Prose* (eds. David Loewenstein and James G. Turner, 1990)の書評において、ミルトン研究者のさらなる課題は、散文作品が具体的にいかなる形で*Paradise Lost*その他の大作成立にかかわったのかを解明することにあると述べた。¹ この言葉はその後の論者のミルトン研究の方向性を決定するものとなった。本論考においては、『偶像破壊者』、『第一弁護論』、及び『第二弁護論』におけるミルトンの敵対者たちの多様なイメージが『樂園の喪失』における大いなる敵対者サタンの像に収斂していることを論証する。

¹ 『英語青年』一九九〇年一月号三九—四〇ページ。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理をしるべとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

ここで『偶像破壊者』、『第一弁護論』、そして『第二弁護論』成立に至る当時の状況を簡単に見ておこう。

一六四九年一月三〇日、かつての英国王チャールズ一世は処刑された。王の遺骸が埋葬された翌二月九日にイングランド国内でジョン・ゴードン（一六〇五-六二）の手になる『王の像』が英語で出版された。殉教のキリストに模せられた国王自身の執筆という体裁を取ったこの書は爆発的な売れ行きを見せた。一〇月、共和政府はラテン語担当秘書官ミルトンによる『偶像破壊者』を出版して『王の像』に応酬した。

一一月には、オランダから英国の新政権を全ヨーロッパに向かって公然と糾弾する『チャールズ一世弁護論』がフランスの学者サルマシウス（一五八八—一五三）によりラテン語で出版された。一六五〇年一月、國務會議はミルトンに反駁論執筆を命じ、翌年二月、ラテン語による『第一弁護論』が出版される。

一六五二年九月中旬、またもやオランダから『王の血の叫び』と題された、『第一弁護論』反駁の書が匿名で出版された。著者ピーター・ドゥ・ムラン（一六〇一—一六八四）は、共和政府を糾弾するとともにミルトン個人をも攻撃した。これに対してミルトンは五四年五月、『第二弁護論』で応酬した。この間ミルトンを次々と襲ったのは失明、妻メアリ・パウウェルの産褥死、そして生後一年になる一人息子の死という家庭的悲劇であった。ミルトンはこうした逆境を乗り越えて『第二弁護論』を出版したのである。

2

I

ミルトンは、共和政府も末期、クロムウェルの死によって英国共和制の先行きが不透明の度合いを増す、一六五八年、『第一弁護論』を見直し[聞き直し]、加筆して再版した。それは混迷の度を深める「イングランド国民」たちを鼓舞することによって、革命当時の初心に立ち戻らせるとともに、今こそクロムウェルの遺志を継いで共和制の拡充と充実を目指すよう促すためであった。³ 加筆部分は全体から見れば極僅かであるが、どれも極めて重要な意味を持っている。⁴ 中でも『第一弁護論』の終結部加筆部分に目を向けるとき、われわれはミルトンが叙事詩風の文体で結論を述べていることに気づく。

² 細は、新井明・野呂有子共訳 『イングランド国民のための第一弁護論』・『第二弁護論』（聖学院大学出版局より近刊予定）に付した野呂作成の「解説」を参照されたい。

³ Yuko Kanakubo Noro, “The Making of Satan, Milton’s Old Enemy—from *Pro Populo Anglicano Defensio* to *Paradise Lost*”, *Bulletin of College of Humanities and Sciences, Nihon University* 65, (二〇〇三年一月発行)を参照のこと。尚、この論文は二〇〇二年六月七日、South Carolina University, Beaufort College で開催された The Seventh International Symposium での論者の口頭発表を文書にしたものである。

⁴ 第二章、第四章、第五章に三ヶ所、第七章冒頭に加筆訂正が五ヶ所、その他二箇所、第八章、第一〇章、そして第一二章終結部の最長の加筆がある。詳細はMartin Dzelzainis ed., John Milton “*Political Writings*”, (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) を参照されたい。『イングランド国民のための第一弁護論』及び『第二弁護論』の訳は新井明・野呂有子共訳『イングランド国民のための第一弁護論』・『第二弁護論』（聖学院大学出版局より近刊予定）による。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『楽園の喪失』へ」『摂理を志すべし—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

わたくしはいま、彼ら〔全キリスト教徒〕のために—わたくしにそれだけの力があり、そして神のご加護があればの話であります—よりいっそう偉大なることを計画し、その準備をすすめているのであります。⁵

このようにミルトンはいっそうの「雅量」が神から与えられることを願いつつ、新たな企てに取りかかろうとする「勤勉さ」に満ちた英雄的自画像を読者の前に提示して退場する。論争の世界を去り、叙事詩の世界へ踏み出そうとする自画像をミルトンは一六五八年の加筆部分に描き出しているのである。

ところで一六五八年といえばミルトンはすでに『楽園の喪失』（一六六七）の口述筆記を開始していたという。⁶ そうであれば、読み直し〔聞き直し〕・加筆・再版したばかりの『第一弁護論』の内容が余韻となってミルトンの脳裡に繰り返し反響し、『楽園の喪失』口述にも何らかの影響を与えたと見るのはごく自然であろう。

『第一弁護論』と『楽園の喪失』との影響関係を論じた批評書の中では、Joan S. Bennett 女史の“God, Satan, and King Charles: Milton’s Royal Portraits”がその嚆矢と言えよう。女史はその精密な議論中で、ミルトンが『偶像破壊者』や『第一弁護論』で展開した王権神授説への反駁と民主主義的合議制に言及し、神と神の御子〔後のキリスト〕が民主主義的合議制に基づいた議論の進め方を採用するのに対し、サタンの側が自己の行為を正当化しようとするにあたり、事実を無視し、王権神授説的言説を振りかざし、論証によってではなく、感傷的で感情的な口調で読者や聴衆の心を掴もうとしていると論ずる。⁷ そしてミルトンが『偶像破壊者』であぶり出して見せた『王の像』の言説こそ、まさに感傷的言説に他ならないのである。

II

『楽園の喪失』においてサタンは様々な扮装や動物のイメージで描かれているが、その様はあたかも芸の未熟な大根役者が目先の変化によって観客の眼を眩ませようとするかのごとくである。しかし、遂に第一〇巻で得意満面、大見得をきってみせようとしたところで仲間の悪魔集団ともども、神により蛇に変身させられてしまう。彼らの発する蛇の威嚇音“hissing sound”は、同時に大根役者やへっぼこ演説家を野次り倒して退場させる意味をも合わせ持つ。人類の大いなる敵対者サタンは、神という偉大なる観客／監督により、大根役者として『楽園の喪失』のテキストという劇場世界から永久追放となるのである。⁸

これと同様、『偶像破壊者』、『第一弁護論』、そして『第二弁護論』においても、

⁵ “God, Satan, and King Charles: Milton’s Royal Portraits”, *PMLA*, Vol.92 (1977), pp.441-457.

⁶ 詳細は Yuko Kanakubo Noro, “The Making of Satan, Milton’s Old Enemy—from *Pro Populo Anglicano Defensio* to *Paradise Lost*”にゆずる。

⁷ *The Works of John Milton*, ed. Frank A. Patterson et al. (New York, 1931-38), vol. VII, p. 13. 以降 CM.と表記する。引用原典は各々、CM, V, 77-8; CM, VII, 232, CM, VIII, p.144. 詳細は Yuko Kanakubo Noro, “The Making of Satan, Milton’s Old Enemy—from *Pro Populo Anglicano Defensio* to *Paradise Lost*”にゆずる。

⁸ Aristophanes, *The Peace, the Bird, the Frogs* (Harvard University Press, 1976), pp.409-413. なお、『第一弁護論』とアリストパネス作『蛙』の関連をいち早く指摘した論文に、大濱えり「偽預言者とがまがえる—『失楽園』におけるサタンのイメージとその生成」（『英語青年』1993年第139巻第八号掲載）がある。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『楽園の喪失』へ」『摂理をよむとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

ミルトンの論敵たちはしばしば退場を余儀なくされる大根役者のイメージで揶揄される。大根役者の筆頭たるチャールズは「自分が召集した最後の議会で……国民のほぼ満場一致の野次の声によって、その非合法の／お粗末に演じられた、王権とともに舞台から退場させられhissing...his ill-acted regality off the Stage」、サルマシウスは「おそまつな」議論のために「で演壇からひきずりおろされ[原文ラテン語のexplodereは英語のhissにあたる]」、「道化師」アレグザンダー・モアは「カエルのようにわめく/蛇のようにシュツと言う[原文ラテン語strideoは英語のcreakとhissの両方の意味がある]」のである。⁹ 彼らはミルトンの論証によって打ち破られ、論戦の場からの退陣を余儀なくされる。そしてチャールズは斬首刑にされ、サルマシウスとモアはともにイスカリオテのユダ同様、改悛し、首を括って自殺するよう勧告される。（CM, VII, p. 549; VIII, p.157）

一見すると極めてグロテスクなこの勧告は、しかしミルトンの独創になるものではない。『第一弁護論』も『第二弁護論』も論敵を揶揄する際に、読者が読了済であることが期待されているギリシア・ラテンの古典的文学の一つがアリストパネスの『蛙』である。ミルトンはたびたび論敵サルマシウスとモアを蛙のイメージで描出して、読者が『蛙』のテキストの余韻と反響を楽しむように『第一弁護論』及び『第二弁護論』のテキストを構築するという戦略を取っている。そして『蛙』の終結部で冥府の王プルートンは、現世に戻ることにしたアイスキュロスに縄を託し、たちに渡して自殺を勧告するようにと促すのである。彼らは「見せかけとうわべ」だけの議論で、迷信と感傷に訴えて烏合の衆を惑わそうとするという点でチャールズ、サルマシウス、モアそしてサタンと同類なのである。

また、「あなたの水差しは壊れてしまった」（CM, VII, p.172）とサルマシウスの大言壮語を揶揄する時、ミルトンは『蛙』の一〇〇行以下で登場人物であるアイスキュロスが問題の語句を何度も用いて、¹⁰ 論敵たる劇作家 [エウリピデス]を揶揄した文学的伝統を踏まえているのである。

カエルと言え、『楽園の喪失』におけるサタンはエヴァを誘惑する際、用意周到に<カエル>→<蛇>という二段構えの策を弄する。彼はまず、第四巻でカエルの姿となって、眠るエヴァの耳もとに座り、毒液を吹き込むようにして飛翔と墜落の悪夢をエヴァにもたらし。彼は最初からエヴァに禁断の木の実を勧めるのではなく、彼女の潜在意識に働きかけて墜落の種を播き、伏線を張るのである。そして、第九巻では美しい蛇の姿となってことば巧みに、覚醒しているエヴァにすり寄り、甘言を弄して誘惑する。このように、『楽園の喪失』において人類の敵対者サタンは、人類の始祖を誘惑する際に、聖書の「創世記」の記述には存在しない<カエル>→<蛇>という変身の過程を踏むの

⁹ 「創世記」の蛇を明確にサタンと同一視する聖書解釈学の経緯においては、殉教者ユスティノスが最初だとする説が有力である。これがアウグスティヌスに引き継がれ、ミルトンはこれを踏襲している。サタンと蛇の同一視の歴史に関しては、ニール・フォーサイス著野呂有子監訳『古代悪魔学—サタンと闘争神話』（法政大学出版局、二〇〇一）を参照されたい。

¹⁰ *The Oxford English Dictionary* の定義 3 は “moving rapidly and easily with a gliding or undulating movement” と蛇の動きを連想するものであり、第三例に当該箇所が掲載されている。定義 4 は植物学の用語として “twining, twisting”、定義 5 では “characterized by great fluency and readiness of utterance” と弁説の滑らかさ、巧さに関連しているが、当該箇所には定義 3 が前景化されると同時に、後に蛇／サタンが禁断の木にツタのように絡み付いて人間を誘惑する絵画が多く描かれていること、また、蛇のすがたをしたサタンが弁説巧みにエヴァを説得することから、定義 4 及び 5 が重層的に包含されていると考えられる。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理を志すべし—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

である。¹¹ かくして、サタンは蛇のみならず、カエルのイメージを重層的に加えられることによって、『樂園の喪失』においては、滑稽で哀れな道化的宿命を担うことになったのである。そしてこの道化のイメージはサタンについて回る。第一〇巻で神により蛇への変身を余儀なくされ、野次り倒されて舞台から退場する時、その滑稽さはクライマックスに達するのである。逆にこれをサタンの側から見れば、雄々しく勇敢な「叙事詩的英雄」としての自己提示がアンティ・クライマックスを迎えることになる。

ところで、『第一弁護論』及び『第二弁護論』においてミルトンの敵対者サルマシウスがサタン同様、カエルと蛇両方の姿で描かれているのは特筆にあたいする。例えば、サルマシウスが詭弁を弄し、何とか言い繕い言い逃れをしようとする様は「鎌首をもたげ、くねくねと動き回る」蛇のイメージで描かれる。国王の超法規的主権を強弁するためにはいかなる詭弁も辞さないというサルマシウスは「上方、下方、あらゆる方向に」「ぐるぐると鎌首をもたげ、くねくねと動きまわる」のであるが、ここで使用されているラテン語原語は“*verto*”と“*voluvo*,” (CM, VII, p. 68)である。ところで、エヴァを詭弁と強弁によって誘惑し、人類の破滅を企む蛇／サタンが木立の間を縫って這う姿は「*voluble and bold* ずぶとくもとぐろを巻きあげる」と形容されている（第九卷四三六行）。『第一弁護論』で敵対者サルマシウスを詭弁家の蛇のイメージで描出する際にミルトンが用いたラテン語 “*voluvo*” の英語化された形“*voluble*”が『樂園の喪失』における人類の敵対者、蛇／サタン描出の決定的場面で用いられているのである。¹²

また、『第二弁護論』で「偉大だ」と褒めそやされたサルマシウスが「ふくれ上がりすぎて自爆してしまったのであります」と言う時、ミルトンの脳裡にはイソップ物語で牛と競って身体を膨らませ過ぎて自爆した蛙への連想が下地にあると考えられる。（『第一弁護論』、『第二弁護論』には他にもイソップ物語への言及が見出せる。）ここでは明らかにサルマシウスは傲慢により自滅するサタンの姿と二重写しになっているのである。このように蛇とカエルのイメージを合わせ持つサタンの原型は『第一弁護論』及び『第二弁護論』のサルマシウスに遡るのである。

さらに、ミルトンは『第二弁護論』における敵対者モアをもカエルのイメージで揶揄する。例えばモアは、アリストパネス作『蛙』において、冥府の泥沼の中でクワクワと鳴き声をあげている蛙の合唱隊に喩えられている。（CM, VIII, p.52; p.80.）これらミルトンの敵対者たちは、大言壮語しながらも実際には『蛙』に登場する冥府の住人たちや泥沼のカエルたちのごとき儂い存在に過ぎないのである。自分では有意義な言説を開示していると思っけていても、それは道化同様、知恵ある人々の耳にはカエルの鳴き声のごとき、空ろで意味のない音の連続としか聞こえない。ここでは、ミルトンの敵対者たる王権神授説の信奉者たちは、冥府の泥沼で、のたうちまわりカエルの鳴き声を上げているイメージで描かれている。このイメージは「うじ虫やゴキブリどもが群がり集う」から召喚されて国王の大義を擁護しようとして失敗した「高慢な文法教師」（CM, VIII, p.98）のイメージと相まって、地獄の火の沼で、のたうちまわり、で勝手気ままに意見を述べ、演説の最中に変身してシューシューと不吉な威嚇音を立てる蛇／悪魔の群れへ

¹¹ 人間から蛇への変身という逸話は、オウィディウスの『転身物語』に跡付けられること、また、蛇の concatenation の伝統はローマの叙事詩人ルカヌスに遡るといふ指摘がある。詳細は *Complete Poems and Major Prose*, ed. M. Y. Hughes (New York, 1957), p. 420 を参照されたい。また、新井明訳『樂園の喪失』（大修館書店、一九八三）、二八一ページも参照のこと。

¹² Yuko Kanakubo Noro, “The Making of Satan, Milton’s Old Enemy—from *Pro Populo Anglicano Defensio* to *Paradise Lost*”.

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理を志すべし—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

と収斂していくのである。

ミルトンはアリストパネスの喜劇『蛙』を下敷きに、現実の人間たちとその言説を題材として、『第一弁護論』及び『第二弁護論』という政治的中に彼独自のを、いわば劇中劇のようにして組み込んだのである。そしてこのミルトンの大胆な手法は、既に見たように『樂園の喪失』という叙事詩の中に、サタンと悪魔の一角を大根役者／道化の一団に見立てたを組み込んで行くという手法に発展していくことになる。

以上から『偶像破壊者』、『第一弁護論』及び『第二弁護論』における敵対者たちにミルトンが与えたイメージの数々—道化、野次り倒される大根役者、とぐろを巻き二枚舌を使う蛇、冥府の泥沼でのたうちまわり空疎な言辞を弄するカエル、首をくくるイスカリオテのユダ—が『樂園の喪失』のサタンの像に収斂していることは明らかである。

しかし、ミルトンの一連の王権反駁論の中で敵対者たちの担うサタンのイメージはこれだけには留まらない。思いつくままに例を揚げよう。

- 1 陰から覗き見る（匿名という盾に身を隠してこちらを覗き見するサルマシウスと、アダムとエヴァの睦まじい夫婦生活を覗き見するサタン）¹³
- 2 真っ逆さまに地獄へ落ちる（自分の議論に気を良くして、傲慢ゆえに失敗するサルマシウスと、天上での戦闘に負けて地獄へ落ちるサタン。イザヤ書一四章一三-一四節には傲慢さゆえに墜落するサタンの姿が描かれる。また、ルカ福音書にはサタンが天からいはずまのように落ちるのをイエスが見たということばが記録されている。）¹⁴
- 3 見かけ倒しの武装に身を包む（大言壮語と思ひ込みの理論で武装するがミルトンの反論によってあえなく敗退するサルマシウス及びモアと、ものものしい武器と武装で天上の戦闘に臨むが、キリストの一撃であえなく敗退するサタン）¹⁵
- 4 不義密通を行う（サルマシウス家の召使いポンティアと密通するモアと、娘の＜罪＞と密通するサタン、母と密通する＜死＞）¹⁶
- 5 異常な出産をする（サルマシウスが異常妊娠・出産し、ポンティアが赤子と共に＜叫びcry＞を異常出産する。サタンが罪を異常妊娠により出産し、罪が死及び猛り狂って＜吠えるcry＞地獄の番犬たちを異常妊娠・出産する）¹⁷
- 6 剽窃と歪曲を行う（『王の像』において神への祈りのことばをサー・フィリップ・シドニーの『アルカディア』から剽窃し歪曲したチャールズ及び剽窃と歪曲の得意なサルマシウスと、神のことばを剽窃して歪曲するサタン）¹⁸
- 7 黄金を渴望する（金貨百枚欲しさに節を曲げて絶対王権擁護に走るサルマシウス、モア及び金欲しさにキリストを売ったイスカリオテのユダと、偽りの輝き [=金メッキ] にこだわるサタン及び黄金に固執するサタンの手下マモン）¹⁹

¹³ *CM*, VII, 23. *PL*, IV, 399.

¹⁴ *CM*, VII, 452. *PL*, VI, 864-71 ; *PR*, IV, 567-71.

¹⁵ *CM*, VIII, 53; 79. *PL*, VI, 99-110.

¹⁶ 例えば、*CM*, VIII, 35; 57. *PL*, II, 762-67; 787-94.

¹⁷ *CM*, VII, 348 ; VIII, 38. *PL*, II, 751-58; 777-87; 795-802.

¹⁸ 例えば、*CM*, V, 86; VII, 41; 68; 306. 一方、サタンは第五巻で仲間の天使達を煽動して神への反逆の片棒を担がせる際にも、第九巻でエヴァを誘惑する際にも、第一〇巻で神の言葉「女の子孫」に込められた神秘を「男の子孫」と取り違える際にも、また他の多くの箇所でも神のことばを曲解・歪曲・捏造する。

¹⁹ 例えば、*CM*, VII, 475; 549, VIII, 111; 157 他。 *PL*, I, 717; II, 270 以下及び VI, 110 など。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理をしるべとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

8 秃鷹 (vulture) の比喩で描かれる (チャールズは、自分に盾突く議員を捉えようと議会に押し入ったが逃げられ、「鳥は逃げてしまった」と言ったと伝えられる。このチャールズの様子をミルトンは『偶像破壊者』において「秃鷹」のイメージで揶揄する。一方、『樂園の喪失』第三卷四三一行では、サタンは餌食を求めて飛翔する残虐な秃鷹のイメージで描かれる)²⁰

これらのイメージが互いに反響し合い連鎖してサタンのイメージに収斂していくのである。しかし、これらのイメージはもともとミルトンの独創というわけではない。厳密に言えば、ミルトンは当時サタンの特質・イメージとして支配的であったこれらの属性を、政治的弁論において敵対者を特徴づける際に用いたのであった。²¹ 現実の論敵にこれらのサタンのイメージを付与することによって、ミルトンのサタン像はさらに鍛え直され検証された。彼はこれらのイメージを敷衍し精密化して『樂園の喪失』のサタン像に結実させていったのである。

従って、ミルトンのサタン像は古典的伝統と聖書解釈学の伝統にのみ基づく、想像と理論の産物などではない。サタン像にはミルトンの生きた時代の様々な生身の人間たちの属性が投影されている。それゆえに、『樂園の喪失』のサタン像はいつの時代にも変わらない、人間のサタンの側面をえぐり出して見せるのであり、そして、その意味できわめて<人間的>な存在となっているのである。Satanistsが途絶えることがないのもそこに理由がある。

III

『偶像破壊者』、『第一弁護論』及び『第二弁護論』におけるミルトンの敵対者たちに極めて顕著なもう一つの特徴は彼らの「女々しさ *effeminacy*」である。通常「女々しさ」という語は女性の否定的側面を表わす語としては使用されない。ミルトンにおいても「女々しさ」とは男性の否定的側面を表わす語として機能するのである。ここで注意を要するのは、「女々しさ」が男性の中の女性的側面すべてをおしなべて否定する語ではないということである。この語の使用によりミルトンが女性蔑視の視点を露呈していると論じるのもまた、性急に過ぎよう。

ミルトンにとって「女々しさ」とは、家長たる男性が共同体の危急存亡の時にあって、女性の過った意見に—その女性に対してある種の弱味を持つがゆえに—盲従し、破滅を招くような行為を取ることを意味する。チャールズ一世もサルマシウスもアダムもサムソンも「女々しさ」のゆえに大きな過ちを犯す。

チャールズ一世はフランス王女であった妻ヘンリエッタ・マライア（一六〇九—一六六九）の影響を受け、次第に英国の政治的慣行と英国プロテスタント教会から逸脱していった。マグナ・カルタに始まる議会と王権との調和という古き政治的伝統を破棄し、妻の父、兄、甥に倣って、英国にはなじまない絶対王政の導入を画策した。英国国教会の首長という立場にありながら、妻の宗教であるローマ・カトリック教を保護し、遂に

²⁰ 例えば、シェイクスピアは『マクベス』において<暴君の誕生とその成敗>をテーマとしたと野呂は解釈するが、マクベスは、「悪魔」、「地獄の犬ケルベロス」そして「道化」等のイメージで言及される。5幕7場、5幕8場他。この問題についてはまた稿を改めて詳細に論じることとする。

²¹ *CM*, V.155.

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理をしるべとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

は自分もカトリックに改宗した。芝居好きが高じて、莫大な費用を注ぎ込んで宮廷仮面劇にうつつを抜かして妻ともども出演し、その尻拭いを国民に押し付けようと新たな税金の取り立てにやっきになった。ミルトンが『偶像破壊者』及び『第一弁護論』で糾弾したように、王という公人の立場にありながら、公費としての税金を私物化した。²² 国民を代表する議会や議員という公的立場の人物たちとともに公共の福祉のために働く義務を放棄して、王妃と取り巻きという私人の意見にのみ耳を貸し、いわば私利私欲に走った。彼に公人という意識があったかどうかは甚だ疑わしい。『第一弁護論』にあるとおりチャールズは「暴君」であり、「芝居の王同様、王の影」に過ぎなかったのである（*CM*, VII, p.16.）。「『偶像破壊者』においてチャールズは「女々しさ」に支配され、妻の尻に敷かれた腑抜けとして繰り返し揶揄されている（*CM*, V, pp.139-140 *et al.*）。

さらに『第一弁護論』及び『第二弁護論』でサルマシウスも「女々しい」男として繰り返し提示される。サルマシウスとその妻は性的役割が逆転しているというのである。そして、サルマシウスは妻に尻を叩かれながら、金稼ぎのためにいやいや就きたくもない職に就き、書きたくもない書物を執筆しているとして揶揄される。また、雌鳥に小突き回される雄鶏の比喻で描かれ、サルマシウスの家では雄鶏ではなく雌鳥がときを告げる始末である（*CM*, VII, p.548 ; VIII, p.16; p.204 *et al.*）。

かつてミルトンはサルマシウスの『教皇首位権反駁論』を読み、そこに示されたサルマシウスの見識を高く評価した（*CM*, III, p.211.）。それゆえ、サルマシウスが「王権神授説」の信奉者として英国共和制を弾劾する側に回ったことは、ミルトンの眼には変節と映り、伝え聞くその恐妻ぶり、吝嗇ぶりが揶揄の対象となったとも考えられる。

ところで、『樂園の喪失』において「女々しさ」のために破滅的な失策を犯すのは、サタンというよりも、むしろアダムである。彼は「女々しさ」ゆえに「愚かにも女の魅力に負けた」（第九卷九九九行）と詩中でははっきりと歌われている。ここでユング心理学の用語を用いるなら、「女々しさ」とはアダムのアニマの否定的側面すなわちサタンの側面を象徴していると言える。彼は既に神の使いラファエルの警告によって、サタンの魔の手が伸びていることを承知していた。それでいながら、自由意志と個人の尊厳を根拠に分業を主張するエヴァに論破されて、エヴァが一人になることを許した。さらに彼は、エヴァへの盲目的「愛」ゆえに、墮落と死を予期しながらも、その手から「死」を招く実を受け取って食らったのである。いわば彼は確信犯である。言い換えればミルトンは、男性にとってそれほどまでに女性は魅了的で、抗いがたい存在であり、それゆえ男性は理性を働かせて女性にのみり込まないように心せよ、と警告していることにもなる。

しかし、アダムはエヴァの夫であると同時に人類の家長としての責任を負っていた。私的な愛に耽溺して全人類を破滅に導く道を取ることは公人としては許されない行為だったのである。ここでのアダムは完全に『偶像破壊者』におけるチャールズや『第一弁護論』及び『第二弁護論』のサルマシウスと同様、「女々しさ」ゆえに妻に支配される「不甲斐ない」夫であり、判断を誤り全人類を破滅へと導くサタンの手先になり下がっている。

しかしミルトンはアダムの失敗をそのままに放置しておくことはない。チャールズや

²² このあたりの議論の詳細については、野呂有子『『イングランド国民のための第一弁護論』における〈自由〉・〈法〉・〈議会〉再考』『聖学院大学総合研究所紀要』第八号（一九九六年）一—四八ページを参照されたい。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『樂園の喪失』へ」『摂理をしるべとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

サルマシウスとは異なり、神の御子の取りなしにより精神的新生を経た後のアダムはもはや情に溺れて妻の言いなりになる夫ではない。同時に、彼は妻の意見が正しければそれに従う「理性」ある夫として提示されている。第一〇巻で自らの過ちに気付いたエヴァが、わが身の非を悔い、ひれ伏してアダムに許しを乞い、神への祈りを捧げようと提案する場面で、アダムは妻の意見を容れて妻と共に祈りを捧げて神に許しを乞うのである。ここで妻の意見を受け入れるアダムは「女々しさ」に負けた夫ではない。彼は妻の「女らしい／人間らしい」正しい提案を提案の正しさゆえに受入れたのである。

さらにその後、エヴァは自分たちの罪ゆえに、子孫たちが死へと引渡されることを嘆き悲しむ。そしてアダムに、共に死のう、自殺すれば人類は絶え、子孫たちも生まれてこなければ死の苦しみに会うこともないだろうと言って説得するが、アダムはこれをきっぱりと拒絶する。エヴァの動機は一見すると私利私欲ではない。いわば「子孫たちのため」、「公共の福祉のため」に自殺という行為を提案しているのである。エヴァはまったく純粋な動機から無意識の内にアダムを死へと誘惑している。だからこそ、この二度目の誘惑は危険極まりないものとなる。彼らはまたしても罪を犯す瀬戸際に立っている。再度罪を犯せばもう二度と救われる機会も与えられないだろう。

しかしアダムは辛い経験を通し、神の御子の助けを得て、今や自分が人類の家長であることをはっきりと自覚している。彼は神と神の御子のことばを信じ、摂理を信じている。そこで彼は穏やかに女を諭して説得する。男の子孫ではなく「女の子孫」が蛇／サタンを打ち負かすことになるという神のことばに秘められた意味をともに熟考吟味しようというのである。もはや彼が「女々しさ」に屈従することはない。²³

ここでのアダムのものには肯定的側面すなわち、キリスト的側面が反映されていると言えよう。このように『樂園の喪失』では、人間の精神はサタンとキリストが各々支配権をかけて死闘を繰り広げる小宇宙として提示されているのである。

そして、われわれはエヴァもまた苦しい体験から学んだことを知る。彼女は尚も言い募ることをせずに、夫のことばに素直に服従するのである。それは夫のことばが一時の感情によるものではなく、「正しき理性」に裏打ちされていると納得したからである。彼女もまた、夫のことばに盲目的に追従する奴隷のごとき妻ではないのである。²⁴

今二人の間に介在するのは盲目的愛や盲目的隷従—どちらもが王権神授説や超法規的絶対王政の根拠となるものであることに注意したい—ではなく、「正しき理性」に裏打ちされた夫婦愛である。「正しき理性」に準拠した関係である限り、エヴァとアダムは「服従する者」と「服従される者」という関係であっても、基本的には対等の関係だと言えるのである。それは為政者と国民とが契約によって結ばれた関係である限り、両者は対等であるとするミルトンの主張からも裏付けられる。²⁵ そしてそのことは『樂園の喪失』の最終巻最終行近くでアダムとエヴァが樂園を追放される際の、しっかりと結び合された二人の手のかたちに象徴されている。

²³ Yuko Kanakubo Noro, "A Comparative Study of 'the Ultimate Love' in Paradise Lost and Shitsurakuen", Tokyo Seitoku University Bulletin No.9. (Tokyo Seitoku University, 2002.) pp.48-49.

²⁴ 『『イングランド国民のための第一弁護論』における自由と隷従』二九三ページを参照されたい。

²⁵ 『『イングランド国民のための第一弁護論』における自由と隷従』二九三- 九四ページを参照されたい。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『楽園の喪失』へ」『摂理をよむべし—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

おわりに

ミルトンは20年に亘る英国共和制への献身の中で、数多くの政治論文を書いたが、それらの作品は決して、彼の目指す「国民的叙事詩」創作とは無縁の無機質な文書群ではなかった。それどころか、彼は様々な論敵との文書の応酬を通して、現実の政治的問題と、人間社会及び人間の有り様を直視し、自らの英雄観と観を現実に照らして鍛え直していったのである。

また一六三二年出版のシェイクスピア全集の第二・ニ折本に付した頌詩からも明らかのように、ミルトンはシェイクスピアの人と作品に深い尊敬の念を抱いていた。²⁶ ミルトンが芝居を嫌い、『コーマス』や『闘技士サムソン』しか執筆しなかった等と決めつけを行い、しかもこれらの劇作品を「清教徒的で面白みがない」と断定するのは余りに狭量な見方であろう。²⁷ 彼は滑稽なを書き、大根役者を野次り倒し、彼独自の道化的を数多く描き出したが、それは『偶像破壊者』、『第一弁護論』、『第二弁護論』等の王権反駁論や叙事詩『楽園の喪失』の枠内で行ったことであった。『楽園の喪失』における大根役者・道化としてのサタンを十分堪能するためには、これらの王権反駁論文は大いなる助けとなるであろう。それはサタンを『楽園の喪失』の「正当なる」とする誤読の危険から読者を救い出してくれるのである。

ミルトンはシェイクスピアに劣らぬ量の劇作品群を政治論文の中に描き込むという、彼独自の形で劇作品を残した。彼のを楽しもうと思う読者はまず『第一弁護論』を読み、それから『第二弁護論』、『偶像破壊者』と読み進み、最後に『楽園の喪失』を読むと良い。そこには現実に裏打ちされたミルトンの芝居観が生き生きと脈打っていることに気付くであろう。

英国共和政府は芝居の上演を禁止したが、そのことをもってただちに清教徒は芝居嫌いであったとか、清教徒であるミルトンもお堅い芝居しか書かない謹厳でユーモアの分からぬ人間だったなどと断定することは危険極まりない。既に指摘したように芝居好きのチャールズ一世は、自分の無能無策から国民の目を逸らすために自ら宮廷仮面劇に出演して、世界の調和と統合を完遂する「理想の王」を演じることによって呪術的に人心を操ろうとした。そしてそれに莫大な費用をかけた。

亡命した皇太子チャールズは母の故国フランスで芝居見物にうつつをぬかし、王政復古時には愛人の女優を引き連れて英国入りした。そしてこれが英国での職業女優第一号となった。そして彼らが演じた芝居は風俗喜劇と呼ばれ不倫を面白可笑しくテーマにしたものが多かったという。

亡き国王が執筆したという芝居がかった演出で出版された『王の像』はお涙頂戴のメロ・ドラマのような内容で英国の一般大衆の心を扇情的に掴んだ。そして王政復古後の英国の舞台では天国のチャールズ一世と残された家族が再会するという、チャールズ二

²⁶ 野呂有子「家父長制度のパラダイム」（『一七世紀と英国文化』（金星堂、一九九五）一〇四ページ）。

²⁷ 仮面劇『ラドロー城で上演された仮面劇』（通称、『コーマス』）について野呂は、当時盛んに上演された宮廷仮面劇及びジャコビアン・ドラマへのアンティ・テーゼの機能を持っていたと考える。また、Victoria Kahn は 第七回国際ミルトン学会の plenary 7 (2002年6月8日)の Aesthetics as Critique in Samson Agonistes と題した講演においてミルトンが王政復古期の腐敗した劇場文化を極めて批判的に捉えており、『闘技士サムソン』はそのアンティ・テーゼとしての役割を担っているという極めて興味深い指摘をした。

野呂有子「道化としてのサタン、サルマシウス、そしてチャールズ一世—王権反駁論から『楽園の喪失』へ」『摂理をしるべとして—ミルトン研究会記念論文集』新井明 野呂有子共編（リーベル出版、2003）53 - 76.

世とその一党の機嫌取りを目的とした芝居が盛んに上演されたという。²⁸

このようにステュアート王家によって芝居が人心懐柔を目的とした愚民政策の一貫として盛んに用いられたというコンテクストの中で、いま一度共和政府が芝居を禁止し、ミルトンが王権反駁論中に描き込んだという事実を見る時、ことは単に芝居の好き嫌いというレベルの問題ではないことが明白になるであろう。スペクタクルという／目くらましに惑わされずに、ことばと思考と論述の力によって歴史を認識し、神に与えられた時を生き抜こうというミルトンの意図をどこまで現実世界で具現化できるかが、われわれに与えられた課題である。

²⁸ 上記の Victoria Kahn の発表に基づく。